

校對源氏物語新釋卷十

310

138

310-138

X

女鑑



始



對源氏物語新釋 卷十

310

138



吉田義則著

對原氏物語新釋



310  
138

### 凡例

本書は湖月抄本を底本とし、尾張徳川家所藏の河内本を以て嚴密に對校して本文を立てた。

一 編讀の便宜上、原本の假名書の部分に適宜漢字を充て、宛字を正して、假名遣を統一し、詞と地とを區別し、濁點・句讀點を施し、かつ適當に分節してある。

一 底本及び河内本に於て誤刻誤寫の明白なものでも、私意を以て之を改める事なく、又假名遣によつて、意味の兩様に解せられるもの及び兩本の特色とする點は特に其儘存し、原本の例をどこまでも忠實に傳へる事に力めた。

一 對校の記號としては黒點と括弧とを用ひた。本文右傍の六ポイント活字中、括弧を以て圍んだ部分は河内本で、黒點はそれに相當する詞を缺いてゐる事を意味するのである。

例へば、

凡例



湖月抄本



いろいろの紙なるふみどもを引きいでて  
 とあるのは、湖月抄本には  
 いろいろの紙なるふみどもを引きいでて  
 とあるのが河内本では  
 いろいろの紙なるふみどもを引きいでて  
 となつてゐるといふ意味である。而して一般に假名の清濁は、「あ・ぼし煩ふ」の  
 如く、前後の續きによつて變更するのである。  
 一句讀を切る事は、半ば意味を解釋するのであるから、この點に特に留意し、從來  
 の句讀を改めた箇所が少くない。  
 湖月抄本には本文の右傍に若干校異を施してあるが、印刷の都合上、今それらの  
 校異は左傍に移した例へば本書に  
 あなくるし　むつまじう  
 とあるが如きは、もと底本に「あなくるし」「むつまじう」などとあつたのを、河  
 内本と對校し異同を記入する必要上斯く改めたのである。

一 註釋は讀者の便を思つて、同註の反復も厭はなかつたのであるが、又多少簡にし  
 たもの、省略したものがないではない。それは附卷の語句索引によつて明瞭なら  
 しめるやうになつてゐる。  
 一 附卷は源氏物語の解題・語句の索引・系圖及び年表から成り、本文篇と相俟つべ  
 きは勿論であるが、單獨に分離しても、常に源氏物語の辭書たるにとどまらず、  
 廣く王朝語・王朝文學の基礎的研究資料たり得る事を信ずるのである。

著者識

源氏物語	卷一	第一	第一
源氏物語	卷二	第二	第二
源氏物語	卷三	第三	第三
源氏物語	卷四	第四	第四
源氏物語	卷五	第五	第五
源氏物語	卷六	第六	第六
源氏物語	卷七	第七	第七
源氏物語	卷八	第八	第八
源氏物語	卷九	第九	第九
源氏物語	卷十	第十	第十

わさ下

第十卷所收目次	
若菜(下)	一
柏木	一三三





















思ひやたる 松原の景は目に入  
らぬいで、紅の柏の袂の懐くま  
まを紅葉の散るに思ひよそへて  
ながめふけつてゐる。

歌仕のおとど 前に太政大臣と  
あつた人。昔の頭中將。  
二の車 第二番目の車、それに  
は尼君が乗つてゐる。一六頁。  
誰か又 昔の事情を知つてあて  
住吉の神代以来の松(あな)は  
に話しかける人は、私以外には  
ない筈です。

かづはゆいしと言忌して、  
住江をいけるかひある諸とは年経るあまも今日や知るらじ  
遅くはびんなからむと、只うち思ひけるままなりけり。  
昔こそまづ忘れぬ住吉の神のしるしを見るにつけても  
と獨りごちけり。夜一夜遊びあかし給ふ。二十日の月遙かにす  
みて、海のおもて面白く見えわたるに、霜のいとこちたうあき  
て、松原も色まがひて、まるづの事をぞろ寒く、面白さもあは  
れさも立ち添ひたり。對の上、常の垣根のうちながら、時々に  
つけてこそ、興ある朝夕の遊びに、耳ふり目馴れ給ひけれ、  
御門より外の物見、をさたし給はず。まして斯く、都のほか  
のありきは、まだならぬ給はねば、珍らしくをかしくおぼさる。  
すみのえの松に夜深くおく霜は神のかけたるゆふかづらかも  
簗の朝臣の、「比良の山さへ」といひける雪のあしたを思しやれ  
ば、祭の心受け給ふしるしにやと、いよく頼もしくなむ。女

かづはゆいしと言忌して、  
住江をいけるかひある諸とは年経るあまも今日や知るらじ  
遅くはびんなからむと、只うち思ひけるままなりけり。  
昔こそまづ忘れぬ住吉の神のしるしを見るにつけても  
と獨りごちけり。夜一夜遊びあかし給ふ。二十日の月遙かにす  
みて、海のおもて面白く見えわたるに、霜のいとこちたうあき  
て、松原も色まがひて、まるづの事をぞろ寒く、面白さもあは  
れさも立ち添ひたり。對の上、常の垣根のうちながら、時々に  
つけてこそ、興ある朝夕の遊びに、耳ふり目馴れ給ひけれ、  
御門より外の物見、をさたし給はず。まして斯く、都のほか  
のありきは、まだならぬ給はねば、珍らしくをかしくおぼさる。  
すみのえの松に夜深くおく霜は神のかけたるゆふかづらかも  
簗の朝臣の、「比良の山さへ」といひける雪のあしたを思しやれ  
ば、祭の心受け給ふしるしにやと、いよく頼もしくなむ。女

俄かに引きほころばしたるに、紅、深き袖の袂の、うらじけれ  
たるに氣色ばかり濡れたる、松原をば忘れて、紅葉の散るに思  
ひわたる。見るかひ多かる姿どもに、いと白く枯れたる萩を、  
高やかにかざして、只ひとかへり舞ひて入あぬるは、いと面白  
く飽かずぞありける。  
おとど昔の事をばし出でられ、中頃しづみ給ひし世の有様も、  
目の前のやうにさばさるるに、その世の事、打亂れ語り給ふべ  
き人もなければ、歌仕のおとどを思ひく思ひ聞え給ひける。  
入り給ひて、二の車に忍びて、  
誰か又心を知りてすみよしの神代を經たる松にこと問ふ  
御疊紙に書き給へち。尼君うちしをれたる。斯かる世を見るに  
つけても、かの浦にて、今はと別れ給ひし程、女御の君のおは  
せし有様など思ひいづるも、いと忝かちける身の宿世の程を思  
ふ。世ををむき給ひ、し入も戀しく、さまざまに物悲しきを、



神の御手に取りもたる神葉にゆふかはをふる深き夜の霜の  
 中務の君、  
 折節の歌は、例の上手めき給ふ男たちも、なかく、  
 松の千年より離れて今めかしき事しなれば、  
 ほのくと明けゆくは、霜はいよ／＼深くて、  
 しきまで酔ひすぎにたる神樂おもてどもの、  
 で、面白きことに心はしみて、  
 歳を」と神葉を取返しつづつ、祝ひ開ゆる御代の末、  
 ぞいとどしきや。よろづの事飽かず面白きままだ、  
 になさまほしき夜の、何にもあらで明けぬれば、  
 ふも口惜しく若き人々、思ふ。松原に、はる／＼と立て續けた

御車どもの、風に打靡く下簾垂のひま／＼も、  
 花の錦を引き加へたると見ゆるに、上のきぬのいろ／＼けぢめ  
 おきて、をかじき懸盤取りつづきて、物参りわたすとぞ、  
 などほ、目につきてめでたしと思へる。尼君のお前も、  
 浅香の折敷に、青鈍のおもてありて、  
 さまじき、女の宿世かな」と、  
 詣で給ひし道は、  
 所せげなまじを、かへさはよるの道邊を盡し給ふ。言ひのづ  
 もるもするさ々、むつつかしき事どもなれば。斯かる御有様  
 をも、かの入道の、聞かす見ぬ世にかけ離れたまへるのみなむ  
 飽がざりける。難きことなりかじ。まじらばまじも心苦しや。  
 世のなかの人、これをためしにて、心高くなゆべき頃なめり。  
 よろづの事につけてめであさみ、世のことぐさにて、「明石の尼  
 君」とぞ幸人にいひける。かの致仕のお辰殿の近江の君は、雙





げにさりとも 本當に何といつても人とは違つてゐるだらう。院のお前で一杯お弾きになる時に、参つて聞きたいものだ。

年頃さりぬべき 私もこれまで何があるかといふに、お上手に出来たものもあるが、いかに上へした事へのおおはれども、ままだ出るまでにはなつてゐられないのに。

何心もなつて 院は宮が何の氣にならうと、のつびささせず、開かうとなさいます。やうだが、それは賞感します。

大曲 河海「琴之大曲也、春ハ角ハ夏ハ秋ハ冬ハ、冬ハ羽、土用ハ宮也、律ハ寒、呂ハ温也。又云、琴有二大曲、中曲小曲、出二太

この折、この機会に、今まで何と聞いた事のないやうな手をお弾きになるだらうか、聞きた

御子二所 明石文御の御覧に。神事などに、十一月は年中に於て神事が行はれる故、懐妊の身でそこに居るのは、有りあらずの口實で。

などて我に、なぜ源氏は自分に敵へて下さらなかつたかと。

御ことども 絃樂器の難儀。

こなたかなたの、たれかれの春著の御準備に、素上自身までが自然手を下さねばならぬ用事もあ

るを、うちにも聞召して、耳げにさりともけは、殊ならむかし。院のお前にて手盡し給はむついでに、参りて聞かばや。など宣はせけるを、あとの君も傳へ聞き給ひて、耳年頃さりぬべき

ついでごとには、教へ聞ゆることもあるを、そのけは、ひは、げにまさり給ひにたれど、まだ聞召しどころある物深き手には及ばぬを、何心もなく、参り給へらむついでに聞召さむと、許し

なくゆかしがらせ給はむは、いとほしたなかるべき事にも」と、いとほしく思ひして、此頃を御心とどめて教へ聞え給ふ。調べ殊

なる手二つ三つ、面白き大曲どもの、四季につけて變るべき響き、空の寒さぬるさを整へ出でて、やんどとなかるべき手の限

りを、取り立てて教へ聞え給ふに、心もとなくおはするやうなれど、やうやく、心得給ふまゝに、いとよくなめ給ふ。耳盡はい

と人繁く、なほ一度もゆしあんずるいとさも心あわただしければ、夜々なむ、静かに事の心もしめ奉るべき」とて、對にも

その頃は御いと聞え給ひて、明暮教へ聞え給ふ。女御の君に對の上にも、琴は習はし奉り給はざりければ、この折、折をさ

をさ耳馴れぬ手ども、彈き給ふらむを、ゆかしとおぼして、女御も、わざと、ありがたき御いとまを、ただ暫し」と聞え給ひて、

まかば給へり。御子二所おはするを、又も氣色ばみ給ひて、五月ばかりにぞなり給へれば、神事などにことつけておはします

なりけり。十一月過ぐしては、参り給ふべき御消息うち頻りあれど、斯かるついでに、斯く面白き夜々の御遊び

を羨しく、などて我に傳へ給はざりけむと、つらく思ひ聞え給ふ。冬の夜の月は、人にたがひてめで給ふ御心なれば、面白き

夜の雪の光に、折にあひたる手ども、彈き給ひつつ、さぶらふ人も、すこしこの方にほのめきたるに、御ことどもとりんに

弾かせて、遊びなどし給ふ。年の暮れつ方は、對などにはいそがしく、こなたかなたの御營みに、あつづから御覽じ入る事



すこしねびたれど、多少ふけて  
 居つても趣味のある女房だけ  
 置けてお供させられた。  
 童の汗は、赤色に櫻の汗疹、薄色の織物の柏、浮文のうへの袴、  
 赤の袴ちたる、さすもてなしすぐれたる限りを召し、  
 女御の御方にも、御しつらひなど、いとどあらたまれる頃の曇  
 りなきに、おのゝいどましく盡したるよそほひども、あざや  
 かに二なし。童は青色に蕪芳の汗疹、唐綾のうへの袴、柏は山  
 吹なる唐の袴を、同じ、さまに整へたり。明石の御方は、こと  
 ごとしからで、紅梅三人、櫻工人、あをじの限りにて、拍、  
 ぐ薄く、摘目などえならで著せ給へり。  
 宮の御方にも、斯くつどひ給ふべく聞き給ひて、童への姿はか  
 りは、殊につくろはせ給へり。青丹に柳の汗疹、蒲萄桑の柏な  
 ど、殊に好ましく珍らしきさまにはあらねど、大方のけはひの

さいへど、さすがは女三宮の御  
 方であるから。  
 こなたかなた、紫上や明石女御  
 などの間は、几帳だけで仕切つ

右の大體の三郎、黒黒の三男即  
 ち玉堂の兄君、黒黒には男子  
 が四人あり、先妻の御腹の兄君  
 三男四男は玉堂の御腹の長男で  
 左大將の御腹、夕舞の長男で  
 御し給ふ、源氏御秘蔵の。

新くことな、しき、こんな名器  
 は弾きこなせまいと源氏はあぶ  
 なく思つて、例の弾き馴れてあ  
 じられるのを、調子を合せてお渡  
 したる。  
 よくその心しらひ、その點をよ  
 く注意してきちんとしておくべ  
 きだが、この笛吹きども、黒黒夕舞の子  
 供達の事、笛によつて拍子  
 拍子整へむ類、笛によつて拍子  
 はならぬ。

ふ。御供に、我もくと物ゆかしがりてまうのほらまほしがれ  
 ど、こなたに遠きをばえりとどめさせ給ひて、すこしねびたれ  
 どよしある限りえりてさぶらはせ給ふ。童へは、かたちすぐれ  
 たる四人、赤色に櫻の汗疹、薄色の織物の柏、浮文のうへの袴、  
 紅の袴ちたる、さすもてなしすぐれたる限りを召し、  
 女御の御方にも、御しつらひなど、いとどあらたまれる頃の曇  
 りなきに、おのゝいどましく盡したるよそほひども、あざや  
 かに二なし。童は青色に蕪芳の汗疹、唐綾のうへの袴、柏は山  
 吹なる唐の袴を、同じ、さまに整へたり。明石の御方は、こと  
 ごとしからで、紅梅三人、櫻工人、あをじの限りにて、拍、  
 ぐ薄く、摘目などえならで著せ給へり。  
 宮の御方にも、斯くつどひ給ふべく聞き給ひて、童への姿はか  
 りは、殊につくろはせ給へり。青丹に柳の汗疹、蒲萄桑の柏な  
 ど、殊に好ましく珍らしきさまにはあらねど、大方のけはひの

い、がめしくけ高き事、さいへど並ひなし。痛の、中の御障  
 子を放ちて、こなたかなた御几帳ばかりをけぢめにて、中の間  
 は、院のおはしませべき御座よそひたり。今日の拍子合には、童  
 べを召さむとて、右の大體の三郎、かんの子の御腹の兄君笙の  
 笛、左大將の御太刀横笛を吹かせて、簀子にさぶらはせ給ふ。  
 内には御しとねども並べて、御ことども参りわたす。秘し給ふ  
 御ことども、うるはしき紺地の袋どもに入れたる、取りいでて、  
 明石の御方に琵琶、紫の上に和琴、女御の君に箏の御こと、宮  
 には、斯くことな、しき、ことはまだえ弾き給はずや、と危く  
 て、例の手馴らし給へるをぞ、しらべて奉り給ふ。三、箏の御こ  
 とは、ゆるぶとなけれど、なほ斯く物に合する折の調べにつけ  
 て、琴柱の立ちど亂るるものなり。よくその心しらひ整ふべき  
 を、女はえ張りしづめじを、なほ大將をこそ召し寄せつべかめ  
 れ。この笛吹きども、まだいとをさなげにて、拍子整へむ頼み













多くの年を、咲花一うづづの便  
 也。贈合巻に見ゆ。一  
 げにはた、能くはあつたが如何  
 にも。  
 時ならぬ雲を、河海一文、  
 成公子名、秋、  
 秋、  
 うつば、  
 つるに、  
 花の如く、  
 つるに、  
 雲家の如く、  
 きに、  
 は、  
 帝の、  
 未だ、  
 人の、  
 斯く、  
 世の家、  
 爲か、  
 鬼神、  
 其、  
 何事、  
 唐土、  
 うに、  
 世の中、  
 と言は

初めつ方まで、深くこの事を心得たる人は、多くの年を知らぬ  
 國に過ぐし、身をなきになして、この事をまねび取らむと感ひ  
 てだに、し得るは難くなむありけるを、げにはた明かに空の月  
 星を動かし、時ならぬ雪を降らせ、雲いかづちを騒がしたる  
 ためし、あがりたる世にはありけり。斯く限りなきものにて、  
 そのままに習ひ取る人のあうがたく、世の末なればにや、いづ  
 このそのかみの片端にかはあらむ。されどなほかの鬼神の耳と  
 ども、かたぶきそめにけるものなればにや、なまじくになねび  
 て、思ひかなはぬたぐひありけるのち、これを弾く人よからず  
 とかいふ難をつけて、うるさきままに、今はをさく傳ふる人  
 なしとが。いと口惜しきことにこそあれ。琴のねを離れては、  
 何事をか物を整へ知るべとはせむ。げによろづの事衰ふる  
 さまは易くなりゆく世の中に、一人出で離れて、心を立てて、  
 唐土高麗とこの世に感ひありき、親子を離れむことは、世の中

などかなのめにて、平凡でもよ  
 いから、この道を一通り心得る  
 だけの糸口は知つておきたいも  
 のです。

いはむや、まして種々の調子や  
 複雑な曲が多くあるのに、私が  
 等に熱中した感の時代には、私  
 にありとある、日本に傳はつた  
 譜といふ譜を、廣く見比べて、  
 彼々は師匠とする人もないで、  
 心に打込んで稽古しました。が  
 矢張昔の人には、其の譜のもの  
 はありませぬ。

この調子たちの、明石女御の御  
 子達の中で、私の思ひ通りに成  
 人なさる方があるなら、その時  
 には、それもよしその時迄私  
 が生きてゐるやうでしたら、ど  
 れほどでもない私の全奏法をお  
 傳へしませう。

二の宮 後に式部卿宮と申す。

にひがめるものになりぬべし。などかなのめにて、なほこの道  
 を通はし知るばかりの端をばしりあかさらむ。調へ、手に手  
 弾きつくさむ事だにはかりもなきものななり。いはむや、多く  
 の調べ、煩はしき曲多かるを、心に入りしさかりには、世にあ  
 りとあり、此處に傳はりたる譜といふものの限りを、あまねく  
 見合せて、のちくは師とすべき人もなくてなむ好み習ひしか  
 ど、なほあがりての人には、當るべくもあらじをや。ましてこ  
 の後といひては、傳はるべき末もなき、いとあはれとなむ。な  
 ど宣へば、大將、げにいと口惜しく恥かしと書ばす。馬、この御  
 子たちの御中に、思ふやうに生ひいで給ふ物も給はば、その世  
 になむ、そもさまでながらへとまるやうあらば、いくばくなら  
 ぬ手の取りもとどめ奉るべき。二の宮、今より氣色ありて見  
 え給ふを、など宣へば、明石の君は、いとあもだたしく、涙ぐ  
 みて聞きぬ給へり。



すこし吹き鳴らし 折角の贈物  
であるから。  
御子のもち給へる 夕暮は子息  
の持つてゐた笛を取つて、大層  
面白く吹き立てられる。

いづれもく 源氏は自分の歌  
へた夕暮の笛、女三宮の琴も、  
何れも優れてゐるのだ、自分の  
技藝の平凡な心算を自覚される  
のであつた。

等のことの 紫上の等が常  
と變つて面白かつたのが耳につ  
いて、深く思はれる。  
北方の 奏上の母、致仕大臣の

男君の 喉屋は夕暮の前では  
取出しがつて少しもお弾きにな  
らず、差出口をきいたり、物を  
知りたがつたり、こせしくしな  
どりと、何事も只おとなしくおつ  
て話に忙しくてゐるやうに思はれ  
る。意味は缺けてゐるやうに思はれ

うへはとまり給ひて、紫上は昨  
と女三宮の御方に泊られて、  
つて来られた。  
いとうるせく 大變上手に。

初めつかた 最初宮の御方で一  
寸開いた折には、どうかと思ひ  
ました。が、いかでかはこのよ  
うな折は「いかでか」の意。  
他事なく 専念に。

豊東なからぬ しつかりした師  
匠だからね。

事はさりともし、いくら何でも琴  
だけは教へてくれるだらう。  
さばかりの事をだに、院が折角  
宮の御後見として、預けられた  
なりとも教へてあげなければな  
るまいと奮發したのです。  
昔世づかぬ程 昔あなたがあつた  
少折に色々世話して居つた。當  
時、私もその頃は暇がなくて。

いみじき高麗笛なり。すこし吹き鳴らし給へば、  
いかに、大將立ちとまり給ひて、御子のもち給へる笛を取り  
て、いみじく面白く吹き立て給へるが、ひとめでたく聞ゆ  
れば、大いづれもく、皆御手を離れぬ物の傳へく、いと二な  
くのみあるにてぞ、  
大將殿は、君だちを御車に乗せて、月の澄めるに、  
道すがら、等のことの、變りていみじかりつるねも耳につきて、  
驚しく覺え給ふ。わが北の方は、故大宮の教へ聞え給ひしかど、  
心にもしめ給はざりし程に、別れ奉り給ひにしかば、  
にも彈き取り給はて、男君のお前にては、恥ぢて、更に彈き給  
はず、何事もただおいらか、  
もあつかひをいとまなくつぎ、  
覺ゆ。さすがに腹あしぐで、物ねたみうちしたる、愛敬づきて

かはいらしい人  
うつくしき人さまにぞ物し給ふめる。  
院は對へわたり給ひぬ。うへはとまり給ひて、宮に御物語など  
聞え給ひて、暖にぞわたり給へる。日高なるまで大殿罷れり。  
女三宮の御ことのねは、いとうるせくなりけり。な。いかに聞  
きひし」と聞え給へば、初めつかた、あなたにてほの聞きし  
は、いかにぞありしを、いとこよなくなりにけり。いかでか  
は。斯く他事なく教へ聞え給はむには」といへば、聞え給ふ。  
かし。手を取る。豊東なからぬ物の師なりかし。これかれ  
にも、うるさく煩はしくて、いとま入るわざなれば、  
ぬを、院にもうちにも、  
と聞く。がいとほしく、さりともし、さばかりの事をだに、斯く  
取り分きて御後見にと預け給へるしに、思ひ起してな  
む」など聞え給ふついでにも、昔世づかぬ程をあつかひ思  
ひしさま、その世にはいとまもありがたくて、心のどかに取り

ひしさま、その世にはいとまもありがたくて、心のどかに取り











そこどころともなく、どこが特  
にわるいといふ事もなく、ひど  
く苦しまれて、時々胸が痛んで  
来て、寝まされる様子は、たまらな  
さきうに苦しげである。

おもしと見れど、重病でも自然  
快方に向ふ様子が見えれば、自然  
しいが、業上の病氣はさうでな  
いから、他事おぼされねば、他事を考へ  
る餘裕がないので。

同じさまにて、業上の病氣が同  
じやうな得意のまままで、  
試みに所をかへ、場所をかへて  
養生して見たら、よい目も見える  
かと思つて。

大方のそば、源氏が往はる昔  
酒の御新納は、勿論の事、夕暮も  
自分の志で、特別に始めさせな  
る。何か物おぼしなく、業上が少  
し、  
出ぬの事をお許し下さなひで  
おめしい。

日頃経ぬ。いかならむとあほし騒ぎて、御祈りども致知らず始  
めさせ給ふ。僧召して、御加持などせさせ給ふ。そこどころと  
もなく、いみじく苦し給ひて、胸は時々起りつつ煩ひ給ふ  
さま、堪へがたく苦しげなり。さまの御憤しみ限りなけれ  
ど、しるしも見えぬ。あもしと見れど、あつから怠るけぢめ  
あらば頼もしきを、いみじく心細く悲しと見奉り給ふに、他事  
あぼされねば、御賀の響きもしづまりぬ。かの院よりも、斯く  
煩ひ給ふよし聞召して、御とぶらひいと懇ろにたびく聞え給  
ふ。  
同じさまにて二月も過ぎぬ。いふ限りなくあほし敷きて、試み  
に所をかへ給はむとて、二條の院に渡し奉り給ひつ。院の内ゆ  
すり満ちて、思ひ敷く人々多かり。冷泉院も聞召し敷く。この  
大亡せ給はば、院も必ず世を背く御本意、遂げ給ひてむと、大將  
の君なども、心を盡して見奉りあつかひ給ふ。御修法などは、

大方のそばはるものにて、取りわきて仕うまつらせ給ふ。聊か  
物あほし分くひまには、聞ゆることを、さも心憂くとのみ  
恨み聞え給へど、限りありて別れ果て給はむよりも、目の前に  
わが心とやつし捨て給はむ御有様を見ては、更に片時堪ふまじ  
くのみ、惜しく悲しかるべければ、昔より、みづからを斯か  
る本意深きを、とまりてさうくしくあぼされむ心苦しさに引  
かれつつ過ぐすを、さかさまに打捨て給はむとあほすとの  
み惜しみ聞え給ふに、げにいと頼みがたげに弱りつつ、限りの  
さまに見え給ふ折々多かるを、いかさまにせむとあほし感ひつ  
つ、宮の御方にも、あからさまに渡り給はず。御ことどもも  
すさあじくして、皆引きこめられ、院の内の人々は、皆あ  
る限り二條の院に集ひ参りて、この院には、火を消ちたるや  
うにて、只女どちあはして。一人一人の御けはひなりけりと見ゆ。  
女御の君も渡り給ひて、もろともに見奉りあつかひ給ふ。



小侍従といふ系圖を左に。

〔姉(柏木の乳母)〕小侍従

けぢかく、手ぢかな乳母の口か

いと清らに、柏木の聞くやう

斯くて院も、第上の病氣で源氏

新くあまたに、源氏が多くの

一人大股籠る、同様の夜も多

同しく暮しておいでになり

同じくば、どうせ平人に嫁せし

あてにしてゐたのに、

新くあまたに、源氏が多くの

一人大股籠る、同様の夜も多

同しく暮しておいでになり

同じくば、どうせ平人に嫁せし

あてにしてゐたのに、

忘られず、小侍従といふ語らひ人は、女三宮宮の御侍従の乳母のひす

めなりけり。その乳母の姉ぞこのかんの君の御乳母なりければ、

早くよりけぢかく聞き奉りて、女三宮まだ宮をさなくおはしましし時

より、いと清らになむおはします、御門のかじづき奉り給ふさ

まなど、聞きおき奉りて、斯かる思ひもつきそめたるなりけり。

斯くて院も離れおはします程、人目すくなくしめやかならむを

推し量りて、小侍従を迎へ取りつつ、いみじう語らふ。

斯く命も堪ふまじく思ふことを、斯かる親しきよすがあり

て、御有様を聞き傳木、塔へぬ心の程をも聞召させて頼もしき

に、更にそのしるしのなければ、いみじくなむつらき。

院の上

だに、「斯くあまたにかけしめて、人にあされ給ふやうにて、

一人大股籠る夜なく、多くつれづれにて過ぐし給ふなり。

ど人の妻しけるのいでも、すこし悔いおぼしたる御氣色にて、

「同じくば、ただ人の心やすき後見を定めむには、こまめやかに

女二の宮の女二宮は柏木に嫁

しておつて安心な末長く話ひ

とばられさうな現状でおいでな

いとほしうも口惜しうも女三

宮は、どんなに苦しんでゐること

か、同じ御筋とは同じ姉妹だ

か、同じ御筋とは同じ姉妹だ

か、同じ御筋とは同じ姉妹だ

か、同じ御筋とは同じ姉妹だ

か、同じ御筋とは同じ姉妹だ

か、同じ御筋とは同じ姉妹だ

か、同じ御筋とは同じ姉妹だ

か、同じ御筋とは同じ姉妹だ

か、同じ御筋とは同じ姉妹だ

か、同じ御筋とは同じ姉妹だ

か、同じ御筋とは同じ姉妹だ

か、同じ御筋とは同じ姉妹だ

か、同じ御筋とは同じ姉妹だ

か、同じ御筋とは同じ姉妹だ

か、同じ御筋とは同じ姉妹だ

か、同じ御筋とは同じ姉妹だ

か、同じ御筋とは同じ姉妹だ

さこそは物は、何事もそんなも

のです。

などてかは、女三宮を柏木に許

すは、女三宮が源氏に定まり給

へ、源氏に定まり給

に、源氏に定まり給

に、源氏に定まり給

に、源氏に定まり給

仕らまつるべき人をこそ定むべかりけれ」と宣はせて、「女二の

宮のながく、うしろやすく、行末長きさまにて物し給ふなるこ

と」と宣はせけるを、傳へ聞きしに、いとほしうも口惜しうも、

いかが思ひ亂るる。げに同じ御筋とは尋ね聞えしかど、それは

それとこそ覺ゆるわざなりけれ」とうちうめき給へば、小侍従

は、「いで、あなほほけな。それをそれとさしあき奉り給ひて、

又いかやうに、限りなき御心ならむといへば、柏木はうちほほる

みて、柏木「さこそは物はありけれ。宮に忝く聞えさせ及びけるさ















もろかづら落葉を何に拾ひけむ名は... 女二宮と女三宮と... 女二宮は女三宮より... 女三宮は女二宮より... 女二宮は女三宮より... 女三宮は女二宮より...

いみじき御心のうちを御愁傷... 御愁傷の御心のうちを御愁傷... 御愁傷の御心のうちを御愁傷... 御愁傷の御心のうちを御愁傷...

もろかづら落葉を何に拾ひけむ名は... 女二宮の事... 女三宮の事... 女二宮は女三宮より... 女三宮は女二宮より... 女二宮は女三宮より... 女三宮は女二宮より...

いみじき御心のうちを御愁傷... 御愁傷の御心のうちを御愁傷... 御愁傷の御心のうちを御愁傷... 御愁傷の御心のうちを御愁傷...

言への心の懸りてこそ... 間であつた時分... 知らぬも出なれど... 大に思ひしに...

又人の知らざらむ... 出た事や私だけ... 言ひ出せば... 我身こそ...

中宮の御事にても... 所の女秋好をよ... 生進の世に... 心なかつた...

感ふを見奉れば、今こそ斯くいみじき身を受けられたれ、古への心の残りて、そ斯くまで参り來たるなれば、物の心苦しさを先見過ぐさで、遂にあらはれぬること。更に知られどと思ひの

じとあはす。中宮の御事にて、ゆと嬉しくあはれしをなむ天翔りても見奉れど、道異になりぬれば、子の上までも深く覺えぬに、ああらむ。なほみづからうらじと思ひ聞えし心の教なむと、



まだいと頼もしげなしや、まだ  
産助助かる見込も立ちませぬ。

わがあやしき、柏木は自分のを  
かした心から夕陽と紫の上との  
竹を繋つてゐるのである。

お母、紫上の事。  
お母、紫上の事。かうして多くの  
見舞の参られた事を源氏が聞  
お母、紫上の事。かうして多くの  
見舞の参られた事を源氏が聞  
お母、紫上の事。かうして多くの  
見舞の参られた事を源氏が聞

中宮をあつかひ、御息所の女で  
あるから。  
女の身は、淫樂、所三有三千  
界、男子諸侯、合集、二一人、女  
人、三、二、一、外、内、心、如、三  
夜、又、二、一、外、内、心、如、三  
夜、又、二、一、外、内、心、如、三

五戒、殺生、偷盜、邪淫、妄語  
飲酒の五を慎み戒める事。五  
戒、殺生、偷盜、邪淫、妄語  
飲酒の五を慎み戒める事。五  
戒、殺生、偷盜、邪淫、妄語  
飲酒の五を慎み戒める事。五

を、物怪のしわざになむありける。やう／＼生き出で給ふやう  
に聞きなし侍りて、今なむ皆人心しづむれど、まだいと頼も  
しげなしや。心苦しき事にこそ」とて、誠まことにいたく泣き給へる  
氣色なり。目もすこし腫れたり。衛門ゑもんの誓、わがあやしき心な  
らひにや、この君の、いとさしも親しからぬ繼母の御ことを  
、いたく心しめ給へるかな、と目をとどむ。斯くこれかき参  
り給へるよし聞召して、眞まことおもき病者の、俄たちまちにとちめつるさま  
なりつるを、女房などは心もえをさめず、亂りがはしく騒ぎは  
べりけるに、みづからもえのどめず、心あわただしき程にてな  
む。殊更になむ斯く物し給へるよろこびは聞ゆべき」と宣へり。  
かんの君は胸つぶれて、斯かる折のらうろちならずば、  
まじく、けはひ恥かしく思ふも、心のうちを腹ぎたなかりける。  
斯く生き出で給ひてのちしも、怖おそろしくおぼして、又々いみ  
じき法どもを盡して、加へ行はせ給ふ。うつし人にてだにむく

つけかりし人の御けはひの、まして世かはり、怪しき物のさま  
になり給へらむを、おぼしやるに、いと心憂ければ、中宮をあつ  
かひ聞え給ふさへをこの折は物憂く、いひもてゆけば、女の身  
は皆同じ罪深きものとぞかし、となべて世の中厭はしく、かの  
又人も聞かざりし御なかの陸物語に、すこし語り出で給へりし  
ことを、いひ出でたりしに、誠とおぼし出づるに、いと煩はし  
くおぼさる。御みかどぐしあろしてむとせちに思したれば、忌むこと  
の力もやとて、御頂みかどしるしばかりはさみて、五戒ばかり受けさ  
せ奉り給ふ。御戒みかどの師、忌むことのすぐれたるよし佛に申すに  
も、あはれに尊たうとき事まじりて、人わろく御かたはらに添そひ居給  
ひて、涙あしのごひ給ひつつ、佛を諸心に念じ聞え給ふさま、  
世に賢くおはする人も、いと斯く御心惑ふことに當りては、え  
しづめ給はぬわざなりけり。いかなるわざをして、これを救ひ、  
かけとどめ奉らむとのみ夜晝おぼし歎なげくに、ほれ／＼しきまで、





うちふくみ 笑にくせがあつてふくれあがつたやうになつてゐるのをいふ。

さまに 眞骨に。

ただよはしげに 清つきがはりきつてゐないでよよくしてつるやうな感じのあることをいつたものである。女房や下部などが多く移り住んでゐるから。昨日今日「ひまにて」にかゝる。昨今は病苦の隙で、気分もはつきりしてゐたので。紫上の氣分がよいため、遺水や前夜を見ても氣持よく感ずるのである。あはれに今まで今まで生きて延びた事を考へて感懐に耽られる。「あはれに」は「おもはず」にかか

清とまると 蓮の露の消え残つてゐるそんな短い間も生きとまつてはなれぬよ。たまにこんな風に気分よく居るだけなのでございませう。蓮の露の「あはれに」の批詞。来世に行つても少しも隔世のなやうに今から約束しておきませう。玉ある一は玉として葉の上にあるの義。蓮葉に玉ある一は「露」の序詞。内にも院にもあまり冷淡にしないで近きに、目先の病人の事でも出来なかつたので、かうした病のひまのあるのに行かずに居れまいと思つて出かけられた。五月雨の後であるからそれ思ひよせた。御心の鬼に 柏木との事がある。日頃の積りを 此頃中の無沙汰をさすのが何気なく装ひながら恨んでゐるのであらうと氣の毒に思つて。

わが身さへ限りと覺ゆる折々のありしはや」と、涙を浮けて宜へば、みづからもあはれとおもほして、消えとまる程やは経べきたまさかに蓮の露のかかるばかりを  
と宜ふ。  
契りあかむこの世ならでも蓮葉に玉なる露の心へだつな  
出で給ふ方さまは物憂けれど、内にも院にも聞召さむ所あり、  
惱み給ふと聞きても程経ぬるを、目に近きに心を感はしつる程、  
見奉ることもをさく、なかりつるに、斯かる雲間にさへやは絶  
えこもらむ、と思し立ち、渡り給ひぬ。  
宮は御心の鬼に、見え奉らむも恥かしくつつましくおぼすに、  
物など聞え給ふ御いらへも聞え給はねば、日頃の積りを、さす  
かにさりげなくてつらしと思しけると、心苦しければ、とかく  
こしらへ聞え給ふ。大人びたる人召し、て、御心地のさまな  
ど問ひ給ふ。「例のさまならぬ御心地になむ」と、煩ひ給ふ御有

とて、御髪すまして、すこし爽かにもてなし給へり。臥しながらうちやり給へりしかば、とみにもかわかねど、つゆばかりうちよくみ迷ふ筋もなく、いとよらにゆらくとして、青み衰へ給へるしも、色はさをに、白く美しげに、透きたるやうに見ゆる御膚つきなど、世になくうたげなり。もぬけたる蟲の殻などのやうに、まだいとただよはしげにあはす。年頃住み給はで、すこし荒れたりつる院の内、たとしへなくせば、にさへ見ゆ。昨日今日斯く物覺え給ふひまにて、心殊につくろはれたる遺水せんざいの、うちつけに心地よげなるを見いだし給ひても、あはれに今まで経にけるをおもほす。池はいと涼しげにて、蓮の花の咲き渡れるに、葉はいと青やかにて、露さらりと玉のやうに見えわたるを、馬かれ見給へ。あそれひとりも涼しげなるかな」と宜ふに、起きあがりて見いだし給へるも、いと珍らしければ、馬斯くて見奉るこそ夢の心地すれ。いみじく



その間にもとや 女三宮が月の出るまで一緒に居たいと思召すのかと源氏は氣の毒になつて

夕露に 綱が鳴いて日が暮れてこそ来ても下さる筈なのに却つてお歸りになるのは、涙に袖を濡らせとおつしやるのですか。

待つ里も 私を待つてゐる二條殿でもこの綱の聲を何と聞かれらだらう。あれやこれやに私の胸を傷ませる綱の聲だ。

靜心なく 源氏は引きとめられながらも紫上の事が心配で。

かはほり 骨の片面にのみ張を張つた扇。廣げた形が編組に似て居るからいふ。これは扇であらう。袖は飾りであつて聞く爲のものではない。 兼の御座である。前頁十

なほ見給ふ文に 事情を知らずなほこれに矢張源氏が居られる筈の手紙だらうと思つてゐる

御前など 小侍は源氏が御前などを召上る方には目もくれず。いささとも いや、まさかそれではあるまい、大變な、そんな筈があるものか、宮はお取直した事だらう。

あなはいはけな あゝ子供だな、こんなものを落しておいて、外の人が見つけたらどうだらう。さればよ 思はぬ事ではないの、真ゆかしい所が少しもないのが氣にかゝると思つてゐたのだ。

人々すこしあかれ 侍女達が宮のお前を引きさがつたので。

まして宜ふは、憎からずかし。その間にもとやあほす、と心苦しげに思して、立ちとまり給ふ。

夕露に袖濡らせとや綱の鳴くを聞く、起きてゆくらむ片なりなる御心にまかせていひ出で給へるもらうたければ、ついで、女三宮を思ひ立て立去りたので「あな苦しや」とうち歎き給ふ。

待つ里もいかが聞くらひかたに、心騒がすひぐらしの聲などあほしやすらひて、なほ情なからひも心苦しければ、とまひ給ひぬ。靜心なくさすがに眺められ給ひて、御菓子ばかりまゐりなどして大股籠りぬ。

まだ朝涼みの程に渡身給はむとて、疾く起き給ふ。耳よべのかはほりを落して、これは風ぬるくこそありけれ」とて、御扇置き給ひて、昨日うたねし給へりし御座のあたりを、立ちとまりて見給ふに、御しとねのすこしまよひたるつまより、淺緑の薄様なる文の、押し巻きたる端見ゆるを、何心もなく引き出で

て御覽するに、男の手なり。紙の香などいと艶に、殊更めきたる書きざまなり。二かさねにこまくと書きたるを見給ふに、

紛るべきかたなく、その人の手なりけりと見給ひつ。御鏡などあけて参らす人は、なほ見給ふ文にこそは、と心も知らぬに、小侍従見つけて、昨日の文の色と見るに、いとみじく、胸のふくと鳴る心地す。御粥など参るかたに目も見やらず。いで、さりとともそれにはあらじ、いとみじく、さる事はありなむや、隠し給ひてけむ、と思ひなす。宮は何心もなく、まだ大股籠

れり。あなはいはけな、斯かるものを散らし給ひて、我ならぬ人も見つけたらましかば、と思すも、心劣りして、さればよ、いとひげに心にくき所なき御有様を、うしろめたしとは見るかし、とあほす。

出で給ひぬれば、人々すこしあかれぬるに、侍従寄りて、昨日の物はいかにせさせ給ひてし。今朝院の御覽じつる文の色こ













優の世を 源氏の歌。あなたに  
のやうには思はれませぬ。私  
な故にわび住所をしたのも  
さ家々なる世の中。あれこれ  
居りますので。あなたに先  
私を捨てて出家された。打  
下さるも第一に私の事を念  
言よりつらき 尙侍になる前  
の源氏とのつらい契りでは  
はれない。今は斯くしも 出  
御返り。今は斯くしも 出  
文を往復する事が出来なく  
最後だと思ふと淋しくて。御  
返り。は句を隔てて。心とど  
書き給ふに願く。

おくれぬ 源氏が「おくれぬ  
さす。口惜しき」といはれたの  
を。船に 明石の浦で漁業をした  
あなたがおくれぬさいましたので  
御向には 一切衆生に善く及ば  
す回向であつても、あなた  
には決して

なほ古りがたく、尼になつた今  
も昔と同じく時代おくれにもな  
らないで。  
いといたくこそ 月夜の歌に  
源氏の出家を思ひつたのである。  
それを指していつたのである。  
さす。船に 明石の浦で漁業をした  
あなたがおくれぬさいましたので  
御向には 一切衆生に善く及ば  
す回向であつても、あなた  
には決して  
なほ古りがたく、尼になつた今  
も昔と同じく時代おくれにもな  
らないで。  
いといたくこそ 月夜の歌に  
源氏の出家を思ひつたのである。  
それを指していつたのである。  
さす。船に 明石の浦で漁業をした  
あなたがおくれぬさいましたので  
御向には 一切衆生に善く及ば  
す回向であつても、あなた  
には決して

「優の世をよそに聞かめや須磨の浦に藻鹽垂れしも誰ならなくに  
さまん、なる世の定めなさを、心に思ひつめて、今までおくれ  
聞えぬる口惜しさを、おぼし捨てつとも、さりがたき御回向の  
うちには、まづこそはとあはれになむ」など、多く聞え給へり。  
疾くおぼし立ちにし事なれど、この御妨げにかかづらひて、人  
にはしかあらはし給はぬ事なれど、心のうちあはれに、昔より  
つらき御契りを、さすがに浅くしも思し知られぬ、など、かた  
がたに思し出でらる。御返り、今は斯くしもかよふまじき御文  
のとぢめと思せば、あはれにて、心とどめて書き給ふ。墨つぎ  
などいとをかし。常なき世とは身一つにのみ知り侍りにしを、  
「おくれぬ」と宣はせたるになむ、げに、  
船にいかがおは思ひおくれけむ明石の浦にいさりせし君  
回向には、あまねきかたにてもいかがはし」とあり。濃き青鈍の  
紙にて、楷にさし給へる、例のことなれど、いたく過ぐしたる

筆づかひ、なほ古りがたくをかしげなり。二條の院におはしま  
す程にて、女君にも、今はむげに絶えぬることにて、見せ奉り  
給ふ。いといたくこそはづかしめられたれ。げに心づきなし  
や。さまんに心細き世の中の有様を、よく見過ぐしつるやう  
なるよ。なべての世の事にても、はかなくものをいひかはし、  
時々によせて、哀をも知り、故をも過ぐさず、よそながらの睦  
びかはし。つべき人は、齋院とこの君とこそは残りありつる  
を、斯く皆そむき果てて、齋院。はたいみじう勤めて、紛れな  
く行ひにしみ給ひにたんなり。なほここのらの人の有様を聞き見  
るなかに、深く思ふさまに、さすがになつかしき事の、かの人  
の御なずらひにだにもあらざりけるかな。女子をおぼし立てむ  
ことよ、いと難かるべきわざなりけり。宿世などいふらむもの  
は目に見えぬわざにて、親の心にまかせがたし。生ひ立たむ程  
の心づかひは、なほ力入るべかめり。よくこそあまたかた





いとをさなき。院はあなたのお  
それな御心を見抜いておかれて  
から、今度も萬事に注意して下  
さい。

うへの御心に背くと、院が、折  
角の御依託に背くやうに閉ざさ  
うかと、それが不安で氣にかか  
り耳に入らぬおかげに思ひま  
して。  
いたすくなく、氣が附かない  
で何でもない人の心ひなりの大  
なるあなたのお心では、私が  
あなたを粗末にするやうにはか  
りお考へになり。  
又今はこまなく、私ももう大  
年を取つてしまつたので、さぞ  
始終御徳の目御費になるだら  
うと。  
かのおぼしおきてたる。院も御  
考があつて御委託になつたので  
せうが、その御委託を受けたこ  
の老人をも、柏木くらゐには思  
つて、さう輕蔑して下さるは思  
古へより本當に、昔から家か  
の出家の事も、佛道にあまり關  
心も持たなさらぬ婦人達にさへ  
取置かれて。

何ばかりおもし、何も迷つ  
て出家し兼ねて、院はあなたを  
せせんが、院が御世の御心託  
になつたその御心の御心を託  
みて、院がかつたのであなたを  
引きつづき、私が院の跡を違つ  
て競争の形で出家してあなたを  
お見捨て申しては、院が願ひが  
ひなく思召すだらうと、それを  
祈願して出家もせざ居るの  
新くて、「御子たち數添ひ云々」  
に係る。

見おきつべし、後に残して出家  
してもよかりさうだ。  
院も、院の御心託も。  
あらむに、院の御心託も。  
合次第で、院の御心託も。  
も情しくば、院の御心託も。  
が樂になつて居ります。

今更に、今更意外な浮名を立て  
て、院の御心を苦しめるやうな事  
はなされるな。  
まほに、院の御心託は、院の御心託  
木の事、院の御心託は、院の御心託  
が、院の御心託は、院の御心託  
られるので。

聞えたるにかあらむ」と宣ふに、  
いとらうたげなり。いたく面瘦せて、  
どあてにをかし。馬いとをさなき御心ばへを見置き給ひて、  
たく、うしろめたがり聞え給ふなりけりと思ひ合せ奉れば、  
よりのちもよろづになむ。かうまでもいかで聞えじと思へど、  
うへの、御心に背くと聞召すらむ事、安からずいぶせきを、  
ここにだに聞え知らせでやはとてなむ。いたりすくなく、ただ人  
の聞えなす方にのみ寄るべかめる御心には、只あるかに淺きと  
のみおぼし、又今はこまなくさだ過ぎにたる有様も、あなづら  
はしく目馴れてのみ見なし給ふらむも、かたぐに口惜しくも  
うれたくも覺ゆるを、院のおはしまさむほど、は、なほ心をさ  
めて、かのおぼしおきてたるやうありけむ。さだ過ぎ人をも、  
同じくならずらへ聞えて、いたくなかるめ給ひそ。古へより本意  
深き道にも、たどり薄かるべき女がたにだに、皆思ひおくれつ

つ、いとぬるきこと多かるを、みづからの心には、何ばかり  
おもひ迷ふべきにはあらねど、今はと捨て給ひけむ世の、後見  
に譲りおき給へる御心ばへの、あはれに嬉しかりしを、引きつ  
づき、争ひ聞ゆるやうにて、同じさまに見捨て奉らむことの、あ  
へなく思されむにつつみてなむ。心苦しと思ひし人々も、今は  
かけとどめらるるほだしばかりなるも侍らず。女御も、斯くて、  
行末は知りたけれど、御子たち數添ひ給ふめれば、みづから  
の世だにのどけくば、と見おきつべし。その外は、誰も、  
あらむに從ひて、もろとも身に捨てむも惜しかるまじき齡ど  
もになりたるを、やうく、涼しく思ひ侍り。院の御世の残り  
久しくもおはせじ。いとあつしくいとどなりまさり給ひて、物  
心細げにのみおぼしたるに、今更に思はずなる御名漏り聞えて、  
御心亂り給ふな。この世はいとやすし。事にもあらず。のちの  
世の御道の妨げならむも、罪いと怖ろしからむ」など、まほに



見しづめ果てて、試験の見たさ  
 に、落着いて二條院で養生し  
 て居られた。六條院に歸つて  
 來られた。御子、後に切兵衛御  
 と申す。大將より一統の兄  
 右大臣殿の北の方、駿馬の委  
 實、御行演奏。御子、御子  
 衛門の督を、柏木を、かうした  
 立大にも物に、入れない。引  
 するやうに、お答の事、い  
 病氣が重いと、いつて、参ら  
 い。そこは、柏木は、どことい  
 て、格別わるい所のある病氣で  
 ないから。柏木に、内  
 心、考へて、ある所、あつて、  
 考へて、ないか、と、源氏は、  
 もつて、

おどろくしき、大層な病氣で  
 なさい。だから、我慢して参り

例のけちかき御子の、源氏は、  
 つもの通り柏木を、身近な御座の  
 中に呼び入れて。

いと用意ありが、極に、用心深  
 うに、落着いた。柏木は、人一倍、  
 のに、今日、一入、着着、加へて  
 あるので、皇女の夫として、も少  
 しの、種も、なき、さうな、人物、である

ただ、事の、さまの、只、あの、一件  
 が、二人とも、人の、氣持を、無  
 して、あるのが、容赦ならぬのだ。

その、事と、なくて、格別、用事、も、な  
 いので、大變、御無沙汰、しました。

ここに、物し給ふ御子、女三宮、  
 法事、御賀の折には、壽命、延など

ゆすりてののしる。二條の院の上は、まだ渡り給はざりけるを、  
 この試験に、まゆて、ぞ、えしづめ果てて、渡り給へる。女御の君も  
 里に、おはします。この度の御子は、又男にて、なむおはしましけ  
 る。すき、いとを、かしげにて、おはするを、明暮も、あそび、奉  
 り給ふ、おはなむ、過ぐる、齡の、しるも、嬉しく、おぼされける。試験に  
 右大臣、殿の北の方、も、わたり給へり。大將の君、丑寅の町にて、  
 まづ、うち、に、調樂のやうに、明暮遊び、ならしたまひければ、  
 かの御方は、お前のものは、見給はず。衛門の督を、斯かる事の  
 折も、まじら、は、せざらむは、いと、は、えなく、さうも、しかるべき  
 ちにも、人怪も、をかたぶき、ぬべき、事なれば、且、参り給ふべき、まし  
 ありけるを、あも、く、煩ふ、まし、申して、参らず。参るは、そ、は、か  
 と、苦しげなる、病に、にも、あち、なるを、思ふ、心のある、おや、と  
 心苦しく、おぼし、取り、わきて、御消息、つかはず。父、あ、と、ども、  
 「な、ど、か、か、へ、さ、い、申、さ、れ、け、る。ひ、が、し、き、や、う、に、院、に、も、聞、召  
 さ、ひ、を、お、ど、ろ、く、し、き、病、ひ、に、も、あ、ら、ず、た、す、け、て、参、り、給、へ、  
 と、そ、の、か、し、給、ふ、に、斯、く、か、さ、ね、て、宜、へ、れ、ば、苦、し、と、思、ふ、  
 参、り、ぬ。  
 ・上達部なども、まだ、つと、ひ、給、は、ぬ、程、な、り、け、り。例、の、け、ち、か  
 き、御、簾、の、内、に、入、れ、給、ひ、て、母、屋、の、御、簾、あ、る、し、て、お、は、し、ま、す。け  
 に、いと、いた、く、瘦、せ、く、に、青、み、て、例、も、誇、り、か、に、花、や、ぎ、た、る、方、は  
 弟、の、君、だ、ち、に、は、も、て、け、た、れ、て、いと、用、意、あ、り、が、ほ、に、し、づ、め、た、る  
 さ、ま、ぞ、殊、な、る、を、いと、ど、し、づ、め、て、さ、ぶ、ら、ひ、給、ふ、さ、ま、な、ど、か、は、  
 御、子、た、ち、の、御、か、た、は、ら、に、さ、し、並、べ、た、ら、む、に、更、に、と、が、あ、る、ま、じ、き  
 を、ただ、事、の、さ、ま、の、誰、も、く、い、と、思、ひ、や、り、な、き、こ、そ、い、と、罪  
 許、し、が、た、け、れ、な、ど、御、目、と、ま、れ、ど、さ、り、げ、な、く、い、と、な、つ、か、し、く、  
 三、その、事、と、な、く、て、對、面、も、い、と、久、し、く、な、り、に、け、り。月、頃、は、い  
 ろ、の、病、者、を、の、み、あ、つ、か、ひ、心、の、い、と、ま、な、き、程、に、院、の、御、賀  
 の、た、め、こ、こ、に、物、し、給、ふ、御、子、の、法、事、仕、う、ま、つ、り、給、ふ、べ、く、あ、り







君達のかたち姿にて、面などを  
着けないうで、美顔のまゝで、  
深きかどくしさを、意深き氣  
のきいた手を附加へて。

衛門の督 柏木が私の趣味の體  
に目をつけては、私に對する  
るのが氣恥かしい。柏木に對す  
る皮肉である。  
さかさまに行かぬ、古今秋上  
一さかさまに年もゆかぬ取り  
もあへず過ぐる齡や共に歸る  
と。  
まめだちくつして、眞面目くき  
つて。「くつして」は「屈」の字。  
意氣銷沈の義。面白く舞も見  
いみじき事。面白く舞も見  
る氣にもなれないで居たのに、  
わざとそれを名ざして、酔つた  
風をして、こんな事を仰しやるが、  
柏木は胸にこたへて。

いとど胸つぶれて、源氏を怖れ  
てゐる所へかう言はれたから。  
いとど胸つぶれて、盃のめぐりくるも頭いたく覺ゆれば、氣色  
ばかりにて紛はずを、御覽じ咎めて、持たせながら度々強ひ給  
へば、はしたなくとも煩ふさま、なべての人に似ずをかし。  
柏木は氣を分るて、  
心地かき亂りて堪へがたければ、まだ事も果てぬに、まかで給  
ひぬるさまに、いといたく感ひて、例のいとどろくしき酔  
にもあらぬを、いかなれば斯かるならむ、つつましと物を思ひ  
つるに、けののぼりぬるにや、いとさいふばかり臆すべき心弱  
さとは覺えぬを、いふかひなくもありけるかな、とみづから思  
ひ知る。暫しの酔ひの感ひにもあらざりけり。やがていと  
たく煩ひ給ふ。あとど母北の方おぼし騒ぎて、よそくにて  
いと覺束なしとて、殿に渡し奉り給ふを、女宮のおぼしたるさ  
ま、又いと心苦し。事なくて過ぐす月日は、心のどかにあいな  
だのみして、いとしもあらぬ御志なれど、今はと別れ奉るべき  
門出にやと思ふはあはれに悲しく、あぐれて思し歎かむことの

樂「喜春樂」などいふ舞どもをなむ、同じ御なからひの君達、  
大人達など舞ひける。暮れゆけば、御簾あげさせ給ひて、物の  
興まざるに、いとうつくしき御うまごの、君達のかたち姿にて、  
舞のさまも世に見えぬ手を盡して、御師どもも、あのくし手の  
限りを教へ聞えけるに、深きかどくしさを加へて、珍らかに  
舞ひ給ふを、いづれをもいとらうたしと思す。老い給へる上達  
部たちは、皆涙落し給ふ。式部卿の宮も、御うまごを思して、  
御鼻の色づくまで鹽垂れさせ給ふ。あるじの院、「過ぐる齡に添  
へては、醉泣こそとどめがたきわざなりけれ。衛門の督、心と  
どめてほほゑまるる、いと心恥かしや。さりとも今暫しならむ。  
さかさまに行かぬ年月よ。老いはえのがれぬわざなり」とて、  
うち見やり給ふに、人よりけにまめだちくつして、誠に心地も  
いと惱ましければ、いみじき事も目もとまらぬ心地する人をし  
も、さしわきて空酔・しつづ斯く宜ふ、たはぶれのやうなれど、

斯かる御中らひは、夫婦といふ  
緒に居るのが普通です。

心盡しなるべきことを、  
美生して御覽なさい。

敵ならぬ身にて、つまたらぬ私  
情が及びもつかぬ夫婦として、  
なまじい女をお許し下さいまし  
て、恐縮してゐます。その思召し  
に答へる爲に、長生きして、生  
きながら、身ながら、人並の  
官位にも昇ります事あらうか  
と、その格別な努力を見て、  
うと思つて居りました。死か  
らんな血病にまでも罹りました  
事、深い志の程さへも見て、  
事、出来なくなつても、死か  
らぬと思ふので、どうせ助かる  
まいと思ふ心にも、死ぬにも  
死なない氣持になります。死  
なないやうなつまたらぬ身であ  
るに、かうして病氣にまでなつ  
てしまひましたから、何ぞを差  
すか。母に會はうと思はないの

斯くいとおぼつかなき  
て、御も見せない事よ。かうし

今になほ、年とりましても、不  
相續私を愛してゐられて。

心地の斯く限りに、壽命ももう  
これまでと思はれる時に、會は  
ないのは、罪も深く、氣がかりに  
なると思ひます。母の所に参  
りませうと思ひます。私がもう助  
かないとお開きになりまして、  
らなうと存じまして、残念に思  
ひます。

行末長くのみ、いつまでも生き  
てゐるものやうに思つてゐまし  
た。のは、思かな事でございます。

大殿に待考受け、父大臣には、柏  
木をわが方に御迎へになつて。

いとど、大殿の許に來てからは  
一層食慾がなくて一寸した蜜柑  
さへも食べようとしない。

忝きを、いみじと思ふ。母御息所も、いとみじく歎き給ひて、  
世の事として、親をばなほさるものにおき奉りて、斯かる  
御中らひは、とある折もかかる折も、離れ給はぬこそ例のこと  
なれ。斯く引き別れて、平かに物し給ふまでも、過ぐし給はむが  
心盡しなるべきことを、暫し、ここに、斯くて、試み給へ。  
と、御かたはらに御几帳ばかりを隔てて見奉り給ふ。柏木ことわ  
りや。數ならぬ身にて、及びがたき御中らひに、なまじひに許  
され奉りてさぶらふしるしには、長く世に待りて、かひなき身  
の程も、すこし人と等しくなるけぢめをもや御覽せらるる。と  
こそ思ふ給へつれ。いとみじく斯くさへなり侍れば、深き志  
をだに御覽じ果てられずやなり侍りなむと思ふ給ふるになむ。  
とまりがたき心地にも、え行きやるまじく思ひ給へらるる。な  
んど、かたみに泣き給ひて、とみにもえ渡り給はねば、又母北  
の方、うしろめたく思ひて、非などかまづ見えむとは思ひ給

まじき。我は、心地もすこし例ならず心細き時は、あまたのな  
かに、まづ取分きてゆかしくも頼もしくもこそ覺え給へ。斯く  
いとおぼつかなき事」と、恨み聞え給ふも、又いとことわりな  
り。柏木人より先なりけるけぢめにや、取分きて思ひならひたる  
を、今になほ愛しくし給ひて、暫しも見えぬをば苦しきものに  
し給へば、心地の斯く限りに覺ゆる折しも、見え奉らざらむ、  
罪深くいぶせかるべし。今はと頼みなく聞かせ給はば、いと忍  
びて渡り給ひて御覽せよ。必ず又對面賜はらむ。あやしくたゆ  
くおろかなる本性にて、事に觸れておろかに思さるることあり  
つらむこそ、くやしく侍れ。斯かる命の程を知らで、行末長く  
のみ思ひは、べりける事」と、泣くく、渡り給ひぬ。宮はとま  
り給ひて、いふ方なくおぼしこがれたり。大殿に待ち受け聞え  
給ひて、よろづに騒ぎ給ふ。さるは、忽ちにおどろくしき御  
心地のさまにもあらず、月頃物などを更に参らざりけるに、い



Handwritten text at the top of the right page, including the word "Belgium" and other illegible characters.

Main body of handwritten text on the right page, written in a cursive style.

つうふま

Main body of handwritten text on the left page, continuing from the right page.











善め聞えさせ給はむ人目一  
の内に就いていふならば「昔  
の人は」とある筈である。湖月  
抄の説は、  
かひなきあはれを、始終同情し  
ていたが、それと今更甲  
斐もない事ではございませうが。

今更に人怪しと今日まで秘密  
を保ちながら今更私の死因を女  
三宮ゆゑだと感づくだらうと思  
ふと、あの世までの苦しみの種  
です。  
あざりいて、柏木が産の陀羅尼  
讀む方へ。  
無期に、いつまでも。

ことずくなにても今日は言葉  
づくなくで私に傳れと仰しやるの  
は、人目を思つての事だ、實は  
いつまでも待つても可い、實は  
と思ふと小侍は可愛さうにな  
つて、歸る氣にもなれない。  
御有様を、柏木の容顏を小侍  
の伯母の乳母も語つて。

思ひまじる方なくて、これが柏  
木の子だらうといふ葉ひがな  
つたならば、  
人には氣色漏らさじと、あまり  
宮を疎略にしては、この秘密を  
人にけどられる恐れがあるから  
わざと御祈願などに念を入れら  
れるのである。  
屬君、これを瀧といふ。後に宇  
治十帖の主人公である。かうした  
秘密であるの、生憎、かうした  
秘木生實の顔で生れて來ら  
れたら困つた事だらう。  
女こそ、女といふものは、胡麻化  
し、がきいて、人目に觸れず、  
むも、のだから安心だ、かうした  
又斯く、心苦しき、又かうした、心  
苦しい、かからぬ男の子である、  
がよ、このだ、それが常性でも不  
思議だ、これは私に報いながら、  
らう。  
この世にて、往生要集云、有智之  
人以三寶力、能令地獄餓鬼之輩  
現世、輕受二惡報之人、現世、輕受  
重。

人の氣色漏らさじと、あまり  
宮を疎略にしては、この秘密を  
人にけどられる恐れがあるから  
わざと御祈願などに念を入れら  
れるのである。  
屬君、これを瀧といふ。後に宇  
治十帖の主人公である。かうした  
秘密であるの、生憎、かうした  
秘木生實の顔で生れて來ら  
れたら困つた事だらう。  
女こそ、女といふものは、胡麻化  
し、がきいて、人目に觸れず、  
むも、のだから安心だ、かうした  
又斯く、心苦しき、又かうした、心  
苦しい、かからぬ男の子である、  
がよ、このだ、それが常性でも不  
思議だ、これは私に報いながら、  
らう。  
この世にて、往生要集云、有智之  
人以三寶力、能令地獄餓鬼之輩  
現世、輕受二惡報之人、現世、輕受  
重。

私の別後、分けて夕の空を眺めて下さい。  
ゆふへは分きて眺めさせ給へ。答め聞えさせ給はむ人目をも、  
今は心やすくおぼしなりて、かひなきあはれをだにも絶えずか  
けさせ給へ」など書き亂りて、心地の苦しさをさりければ、柏木  
「よし、いたう更けぬさきに歸り参り給ひて、斯く限りのさま  
になむとも聞え給へ。今更に人怪しと思ひ合せむを、わが世の  
後さへ思ふこそ苦しけれ。いかなる昔の契りにて、いと斯かる  
事しも心にしみけむ」と、泣く／＼あざりいて給ひぬれば、例  
は無期にむかへすゑて、すずることとをさへ言はせまほしうし給  
ふを、ことずくなにても、と思ふがあはれなるに、えも出でや  
らず。御有様を乳母も語りて、いみじう泣き感ふ。おとどな  
どのあはしたる氣色ぞいみじきや。昨日今日すこしよるしか  
りつるを、などかいと弱げには見え給ふ」と騒ぎ給ふ。柏木「何か。  
なほとまり侍るまじきなめり」と聞え給ひて、みづからも泣い  
給ふ。

女三宮  
宮はこの暮れつかたより惱ましうし給ひけるを、その御氣色と  
見奉り知りたる人々騒ぎみちて、おとどにも聞えたりければ、  
驚きて渡り給へり。御心のうちには、あな口惜しや、思ひまじ  
る方なくて見奉らましかば、珍らしく嬉しからまし、と思せど、  
人には氣色漏らさじと思せば、驗者など召し、御修法はいつと  
なく不斷にせらるれば、僧どものなかに驗ある限り皆参りて、  
加持参りさわぐ。夜一夜なやみあかさせ給ひて、日さしあがる  
程に生れ給ひぬ。男君と聞き給ふに、斯く忍びたることの、あ  
やにくにいちじるき顔つきにてさし出で給へらむこそ、苦しか  
るべけれ、女こそ、何となく紛れ、あまたの人の見ぬものなれ  
ば、安けれ、と思すに、又斯く亦苦しき疑ひまじりたるにて  
は、心やすき方に物し給ふもいとよしかし、さても怪しや、わ  
が世と共に怖ろしと思ひしことの報いなめり、この世にて斯く  
思ひかけぬ事にむかはりぬれば、のちの世の罪も、すこしかる

新く心殊なる... 女三宮の御腹で、而も末子で...

折敷へきて造つた角... 高野の土器の下に輪に造つた高...

心殊に仕うまつり... 赤雲をすべきであるが、萬事を...

みなむや、と思す。人はた知らぬ事なれば、斯く心殊なる御腹...

身の内憂きこと... 身の内憂きことを見るに、ついで...

しとまほす事ありて、いたうももてはやし聞え給はず、御遊び...



あるまじき事とは山嶺の御  
身で御幸は懐しべき事とは  
思召しながら

世の中を浮世の事は忘れてし  
まはうと決心しました矢野  
幣りきれないの子ゆゑの心  
すから後頼第一一人の親の心  
に聞かぬとも子を思ふ道に  
恋ひぬるかた  
おくれ先立つ 新古今哀傷信正  
おくれ先立つためしなるらむ  
この恨みもや 臨終にあはずに  
別れたといふ情が形見となつ  
て残る事だらうさうしたらば  
それが行ひの障にもなるので  
新く物し侍り かうして訪ねて  
来ました  
なつかしきさまに「やつれ給ひ  
て」を修飾する。粗末ではある  
が親しみ易い感じのする服装で  
あつた。  
愛しく見奉り 源氏も出家の志  
を持つてゐられるから

御座る御座 失禮な御座所では  
ございませうが。御座近頃御座入  
れ奉るからである。  
宮をもとかう 女房達が女三宮  
の身の廻りをいから、御世話の  
下におおろし申す。  
御几帳すこし押しやらせ。院が  
宮を御座にならうとして。  
夜居の加持の備 かうしてゐる  
と支居の加持の備と、恰好して  
が、まだ効驗がある程に御行  
す。て、まだ効驗がある程に御行  
す。

さすがに限らぬ命の まだ死の  
とも定まらぬのだから、若  
人は、後になつて間違が起  
世間の人に非難されたいといふ  
差控へる方が宜しからう。それ  
その助けあるべき、その功徳の  
あるやうにしてやりたいと思ひ  
ます。

え給ふを、又も見奉らずなりぬるにや」と、いたう泣き給ふ。  
斯く聞え給ふさま、さるべき人して傳へ奏せさせ給ひければ、  
いと堪へがたう悲しとあはして、あるまじき事とは思召しながら、  
夜に隠れて出でさせ給ふ。か、ねてさる御消息もなく、  
俄に斯く渡りあはしまいたれば、あるじの院、驚きかしてま  
聞え給ふ。ま、世の中を顧みすまじし思ひはべかしかど、なほ感  
ひまめがたきものはこの道の間になむ侍りければ、行ひも懈  
して、もしおくれ先立つの道の道理のままならで別れなば、やが  
てこの恨みもや形見に残らむと、あぢきなきに、この世の誘  
をば知らで、斯く物し侍り」と聞え給ふ。御かたち異にて、  
なまめかしうなつかしきさまは、うち忍びあつれ給ひて、うち  
はしき御法服ならず。藤染の御姿、あらまほしう清らなるも、  
羨しく見奉り給ひ、例のまづ涙あとし給ふ。三、煩ひ給ふ御さま、  
殊なる御惚みにも侍らず。ただ月頃弱り給へる御有様に、はか

ばかしう物なども参らぬ積りにや、斯く物し給ふにこそ」など  
聞え給ふ。馬、傍痛き御座なれども」とて、御帳の前に、御しと  
ね参りて入れ奉り給ふ。宮をもとかう人々つくるひ聞えて、ゆ  
かのしおにあらし奉る。御几帳すこし押しやらせ給ひて、夜  
居の加持の備などの心地すれど、まだ験つくばかりの行ひにも  
あらねば、傍痛けれど、ただおぼつかなく覺え給はむさまを、  
さながら見給ふべきなり」とて、御目あしのごはせ給ふ。宮も  
いと弱げに泣い給ひて、女三「生くべうも覺え侍らぬを、斯くおは  
しましたるついでに、尼になさせ給ひてよ」と聞え給ふ。ま、さ  
る御本意あらば、いと尊きことなるを、さすがに限らぬ命の程  
にて、行末遠き人は、却りて事の亂れあり、世の人に誘らるる  
やうありぬべき事になむなほ憚りぬべき」など宣はせて、おと  
どの君は、斯くなむ進み宜ふを、今は限りのさまならば、片  
時の程にても、その助けあるべきさまにてとまむ思ひ給ふる」





いとふかひなく、宮の御出家  
をつまらなく思ふけれども、そ  
れでもお徳者にさへなられたら  
と幸抱して。

女宮の事はこれに、柏木は女二宮  
の事が不便に思はれるので。  
ここに譲り給はむ。女二宮が柏  
木の方へ訪ねて来られる事は、  
今日明日の命であるのに、今  
更かるん、しいやうでもあら  
し、それに父も母もかう附き切  
りで居られるのだから、自然何  
かの拍子に宮のお察が、それ  
に備れる事もあらう、それでは  
面白くない。

このおとどの、柏木の父大屋が  
熱心に懇望されたその深い志に  
負けて。  
二品の宮の御事を、源氏が女三  
宮につらく當られるのを、兼盛院  
が心配された序に。

思さる。宮女三宮すこし生き出で給ふやうなれど、なほ頼みがたげに  
のみ見え給ふ。さぶらふ人々も、いとふかひなく覺ゆれど、  
かうても平らかにだにおはしまさば、と念じつつ、御修法又延  
べて、たゆみなく行はせなど、よろづにせさせ給ふ。  
かの衛門柏木の誓は、斯かる御事を聞き給ふに、いとど消先入るや  
うにし給ひて、むげに頼む方すくなうなり給ひにたり。女宮の  
あはれに覺え給へば、ここに渡り給はむことは、今更にかるが  
るしきやうにもあらむを、うへもあとも斯くつと添ひおはす  
れば、おのづから取りはずして見奉り、給ふやうもあらむに、  
あぢきなし、とあほして、柏木女三宮の宮に、とかくして今一たびま  
うでむ」と宣ふを、更に許し聞え給はず。誰にもこの宮の御事  
を聞えつげ給ふ。初めより、母御息所は、をさく心ゆき給は  
ざりしを、このおとどの居立ち懇ろに聞え給ひて、志深かりし  
に負け給ひて、院にも、いかがはせむとあほし許しけるを、二

なか／＼この宮は、女二宮は眞  
面目な夫を得て、却つて後々ま  
でも安心だ。

斯くて見捨て奉り、此處死ぬの  
であらうと思ふにつけては、色  
々と氣になるけれども、思ふに  
まかせぬ命ですから、恨めし  
くも添ひとげられぬので、  
おぼしめかたむかぬので、  
おぼしめかたむかぬので、  
とお氣の毒です。

いてあなゆゆし、まあ縁起でも  
いとあなたに先立たれて、私  
あとに何年残ると思つて、かう  
まで將來の事をお願ひなさるの  
よからう。この「御」は無の方  
元聞えや、母上があまり泣か  
れるので、柏木は何も言はれな  
くなつて。柏木は弟で後に紅  
左大辨の君、柏木の弟で後に紅

殿のうちの人も、致仕大臣邸に  
仕へてゐる人々までも。

品の宮の御事を、おもほし亂れけるついでに、なか／＼、こ  
の宮は行く先うしろやすく、まめやかなる後見設け給へり」と  
宣はすと聞き給ひしを、忝く思ひいづ。柏木女二宮斯くて見捨て奉りぬ  
るなめりと思ふにつけては、さまざまにいとほしけれど、心よ  
りほかなる命なれば、たへぬ契り恨めしうて、あほし歎かれむ  
が心苦しきこと。御志ありて、とぶらひ物せさせ給へ」と母上  
にも聞え給ふ。いであなゆゆし。あくれ奉りては、いくばく  
世に經べき御身とて、かうまで行く先の事をば宣ふ」とて、泣  
きにのみ泣き給へば、先聞えやり給はず、左大辨の君にぞ大方  
の事どもは委しう聞えつげ給ふ。心ばへのどかにて、よくおは  
しつる君なれば、弟の君だちも、又すゑの若きは、親との  
み頼み聞え給へるに、かう心細う宣ふを、悲しと思はぬ人なく  
殿のうちの人も歎く。  
おほやけにも惜しみ口惜しがらせ給ふ。斯く限りと聞召して、

よろこびに思ひ起して、昇進の  
悦びに元氣づいて、もう一度参  
内される事もあらうか。  
えためらひやう給はて、病を助  
けて参内する事もならず。

斯くおもき御見え、主上の厚き  
御禮を見るにつけても一入悲  
しく惜しい事とお敷きになる。

馬車立ちこみ、任大納言の賀客  
と見舞客の馬や車がぎつしり結  
めかけて。

おも／＼しき御さまに、官位の  
高いたく、對面したるは對面し  
かねて、對面したいと思ひつづ  
此處衰弱してしまふのだと思ふ  
と残念であるから。

おのづから、病人の事ゆゑ。

別れむことの難しく、死別の悲  
しきや想しさを敷かれる事は親  
兄弟の敷きにも劣らない。

今日は悦びとて、夕暮は、今日  
は昇進のお祝に來たのだから、  
柏木が違者だつたら愉快さうで  
あつたらうと思ふと、誠に殘  
念で、折角來てもその甲斐がな  
い。

烏帽子ばかりを、多少なりと禮  
儀を示さうとして。

御座のあたり、寝床のあたりは  
綺麗にかたづけ、薰物の香が  
かきこもつて、真ゆかしい部屋  
さまであつた。

瘦せさらぼひたるしも、柏木は  
瘦せかけて却つて一層白く上品  
な様子をして。  
久しう煩ひ給ふ、長煩ひの御合  
いはさうやつれてもいらつしや  
いませんでしたね。

俄に權大納言になさせ給へり。よろこびに思ひ起して、今一  
たびも参り給ふやうもやある」と思し宜はせけれど、更にえた  
めらひやり給はて、苦しきなかに、かしこまり申し給ふ。  
とども、斯くおもき御覺えを見給ふにつけても、いよく悲し  
う、あたらしとおぼし惑ふ。大將の君、常にいと深う思ひ敷き、  
とよらひ聞え給ふ。御悦びにも、まづまうで給へり。このおは  
する對のほとり、こなたの御門は、馬車立ちこみ、人さわがし  
う騒ぎみちたり。今年となりては、起きあがる。こともをさ  
をさし給はねば、おも／＼しき御さまに、亂れながらはえ對面  
し給はて、思ひつつ弱りぬることと思ふに、口惜しければ、柏木  
「なほこなたに入らせ給へ。いとらうがはしささまに侍る罪は、  
おのづから思し許されなむ」とて臥し給へる枕がみの方に、僧  
など暫し出だし給ひて、入れ奉り給ふ。早うより、聊か隔て給  
ふことなく、むつびかはし給ふ御中なれば、別れむことの悲し

く戀しかるべき敷き、親兄弟の御思ひにも劣らず。今日は悦  
びとて、心地よげならましをと思ふに、いと口惜しうかひなし。  
夕暮など斯く頼もしげなくはなり給ひにける。今日は斯かる御  
よろこびに、聊かすくよかにもやとこそ思ひ侍りつれ」とて、  
几帳のつまを引きあげ給へれば、柏木いと口惜しう、その人にも  
あらずなりにて侍りや」とて、烏帽子ばかり押し入れて、すこ  
し起きあがらむとし給へど、いと苦しげなり。白き衣どもの、  
なつかしうなよよかなるを數多かさねて、袂引き掛けて臥し給  
へり。御座のあたり物清げに、けはひからばしう、心にくくぞ  
住みなし給へる。打解けながら用意ありと見ゆ。おもく煩ひた  
る人は、おのづから髪髭も亂れ、物むつかしきけはひも添ふわ  
ざなるを、瘦せさらばひたるしも、いよく白うあてはかなる  
けして、枕を敬て物など聞え給ふけはひ、いと弱げに、息  
も絶えつつかはれけなり。久しう煩ひ給ふ。程よりは、殊に







ただ斯く短かき御身にて、怪しくなべての世すまじく思ひ給へけるなりけり、と思ひ出で給ふに、いみじうて、おはし入りたるさまいと心苦し。御息所も、いみじう人笑へ、に口惜しと見奉り歎き給ふこと限りなし。おとど北の方などは、ましていはひ方なく、「我こそ先立たぬ。世のことわりなうつらいいみじき事」とこがれ給へど、何のかひなし。尼宮は、おほけなき心もうたて、のみ思されて、世に長かれとしも思さざりしを、斯くなど聞き給ふは、さすがにいとあはれなりかし。若君の御事を、さぞと思ひたりしも、げに斯かるべき契りにてや思ひの外に心憂きこともありけむ、と思し寄るに、さましく物心細うて、うち泣かれ給ひぬ。

くもてなし。かしづき聞えて、けなつかしう心ばへ、をかしう、打解けぬさまにて過ぐい給ひければ、つらき節も殊になし。ただ斯く短かき御身にて、怪しくなべての世すまじく思ひ給へけるなりけり、と思ひ出で給ふに、いみじうて、おはし入りたるさまいと心苦し。御息所も、いみじう人笑へ、に口惜しと見奉り歎き給ふこと限りなし。おとど北の方などは、ましていはひ方なく、「我こそ先立たぬ。世のことわりなうつらいいみじき事」とこがれ給へど、何のかひなし。尼宮は、おほけなき心もうたて、のみ思されて、世に長かれとしも思さざりしを、斯くなど聞き給ふは、さすがにいとあはれなりかし。若君の御事を、さぞと思ひたりしも、げに斯かるべき契りにてや思ひの外に心憂きこともありけむ、と思し寄るに、さましく物心細うて、うち泣かれ給ひぬ。

程になり給ひて、いと白ううつくしう、程よりはあやすげて、物語などし給ふ。おとど渡り給ひて、御心地はさわやかになり給ひにたりや。いでや、いとかひなくも侍るかな。例の御有様にて、斯く見なし奉らましかば、いかに嬉しう侍らまし。心憂くおぼし捨てけること」と、涙ぐみて恨み聞え給ふ。日々に渡り給ひて、今しもやんごとなく限りなきさまにもてなし聞え給ふ。御五十日に餅まわらせ給はむとて、かたち異なる御さまを、人々「いかに」など聞えやすらへど、院渡らせ給ひて、何か。女に物し給はばこそ、同じ筋にて、いましくもあらめ」とて、南面に、小さき御座などよそひて、参らせ給ふ。御乳母・いと花やかにさうぞきて、お前の物、いろくに盡したる籠物檜破子の心ばへどもを、内にも外にも、もとの心を知らぬ事なれば、取り散らし、何心もなきを、いと心苦しうまばゆきわざなりや、と思す。宮も起きる給ひて、御髪の末の所せう

程になり給ひて、いと白ううつくしう、程よりはあやすげて、物語などし給ふ。おとど渡り給ひて、御心地はさわやかになり給ひにたりや。いでや、いとかひなくも侍るかな。例の御有様にて、斯く見なし奉らましかば、いかに嬉しう侍らまし。心憂くおぼし捨てけること」と、涙ぐみて恨み聞え給ふ。日々に渡り給ひて、今しもやんごとなく限りなきさまにもてなし聞え給ふ。御五十日に餅まわらせ給はむとて、かたち異なる御さまを、人々「いかに」など聞えやすらへど、院渡らせ給ひて、何か。女に物し給はばこそ、同じ筋にて、いましくもあらめ」とて、南面に、小さき御座などよそひて、参らせ給ふ。御乳母・いと花やかにさうぞきて、お前の物、いろくに盡したる籠物檜破子の心ばへどもを、内にも外にも、もとの心を知らぬ事なれば、取り散らし、何心もなきを、いと心苦しうまばゆきわざなりや、と思す。宮も起きる給ひて、御髪の末の所せう





いぶせう毒はれにも 気が様め  
るばかりで悲しい事であつた。  
無茶苦茶に用ひられたものであ  
らう。二義に用ひられたものであ  
らう。柏木の事を思ひ合せるの  
で女三宮の事を思ひ合せるの

かけとどめ奉り 出家を引きと  
めてしまはれたものを。  
取集めて夕暮があれやこれや  
と思ひをめぐらして見るに、こ  
なほ昔より 柏木は矢張り前か  
ら女三宮を始終思はれてゐたの  
が、我儘しきれない時であつた  
のだ。  
何事かこの人の 煩悶などし  
るものか、柏木が何を願つてゐ  
るのか、はたの人まで心苦し  
く感じた程であつたのに。  
いみじくとも、どんなに切ない  
事であつても、そんな事(御通)  
してはならない事に取替へて  
かうして命と交換すべきも  
のではなかつた。

さるべきついで 適當な機会も  
も話さなかつた。この事を源氏に

御わざの 死後の供養の折付違  
へ布施として遺す法服や御装束  
其他一切の準備をも、柏木の兄  
弟姉妹の人々がそれ(おぼ)し  
られた。  
左大辨の君 柏木の弟紅梅。

人の聞えおどろかす 前に「は  
かなく過ぐる日数をも知り給は  
ざ」とあるやうに父大臣母北方  
は七日々々を忘れてゐられる  
から、人がそれを注意して御誦  
經を行つたのである。  
まして覺束なくて 死別の悲し  
みの外に、  
願しく使ひ願らし 柏木が生前  
今も見舞に來る。 柏木が生前

ばかり打出でそめたりしに、いとよう氣色を見てましを、いふ  
かひなきとぢめにて、折あしう、いぶせう、あはれにもあり  
しかなと、面影忘れがたくて、兄弟の君たちよりも、強ひて悲  
しと覺え給ひけり。女宮の斯く世を背き給へる有様、おどろお  
どろしき。惱みに、もあらで、すがやかに思し立ちける程よ、  
又さりととも、許し聞え給ふべき事は、二條の上の、さばかり  
限りにて、泣く／＼申し給ふと聞きしを、いみじき事におぼし  
て、遂にかくかけとどめ奉り給へるものを、など、取集めて思  
ひ碎くに、なほ昔より絶えず見ゆる心ばへ、え忍ばぬ折々もあ  
りきかし、いとよしもてしづめたるうはへは、人よりけに用意  
あり、のどかに、何事かこの人の心のうちに思ふらむと、見  
る人も苦しきまでありしかど、すこし弱き所つきて、なよびす  
ぎたりしけぞかし、いみじくとも、さるまじき事に心を亂り、  
斯くしも身に代ふべき事にやはありける、人の爲にもいとほし

う、わが身はたいたづらにやなすべき、さるべき昔の契りといひ  
ひながら、いとかる／＼しうあぢきなき事なりかし、など心一  
つに思へど、女君にだに聞え出で給はず、さるべきついでな  
うて、院にもまた聞え出で給はざりけり。さるは、斯かる事を  
なむかすめしと申しいでて、御氣色も見まほしかりけり。  
父おとど母北の方は、涙のいとまなく思し沈みて、はかなく過  
ぐる日数をも知り給はず、御わざの法服、御装束、何くれの急  
ぎをも、君たち御方々、とり／＼になむせさせ給ひける。經佛  
のおきてなども、左大辨の君せさせ給ふ。七日々々の御誦經な  
ども、人の聞えおどろかすにも、我にな聞かせそ。斯くいみ  
じと思ひ惑ふに、なかく道妨げにもこそ」とて、亡きやうに  
おぼしほれたり。  
一條の宮には、まして覺束なくて別れ給ひにし恨みさへ添へて、  
日頃經るままたに、廣き宮の内、人げすくなう心細げにて。親し

皆附く所なう。皆所役がないので氣掛けがして。

お前の 一條宮の。時を忘れぬ。おのが笑くべき時節を忘れない。童子であるのを。

隣の君御相 二人共柏木の弟。

おしなべたるやうに。一般のお客様なかにあしらふのは恐縮な程の夕霧の御有様であるからと。

いみじき遺言。柏木の遺言を述しむ事は御身内の方々以上で人だから、御慰め申上げるとも、人だから、御慰め申上げるとも、しなべて、結局世間並になつてしまひました。

く使ひ馴らし給ひし人は、なほ参りとぶらひ聞ゆ。好み給ひし鷹馬など、その方の預りどもも、皆附く所なう思ひらんじて、かすかに出で入るを見給ふも、事に觸れて、あはれは盡きぬものになむありける。もて使ひ給ひし御調度ども、常に彈き給ひし琵琶和琴などの緒も、取り放ちやつされてねを立てぬも、いとらもれいたさわざなりや。お前の木立いたうけふりて、花は時を忘れぬ氣色なるを眺めつつ、物悲しく、さあ、あはれ故殿の御け鈍色にやつれつつ、淋しうのれくなる晝の方、さあ、花やかに追ふふとして、此處にとまりぬる人あり。さあ、あはれ故殿の御けはひとこそ打忘れては思ひつれ」とて泣くもあり。大將殿のあはしたるなりけり。御消息聞え入れ給へり。例の辨の君、宰相などのおはしたると思しつるを、いと恥かしげに清らなる御もてなしにて入り給へり。母屋の廂に御座よをひて入れ奉る。あしなべたるやうに人々のあへしらひ聞えむは、忝きさまのし給

へれば、御息所ぞたいめ・し給へる。夕霧いみじき事を思ひ給へ歎く心は、さるべき人々にも越えて侍れど、限りあれば、聞えさせやる方なうて、世の常になり侍りにけり。今はの程にも、宜ひあくこと侍りしかば、あるかならずなむ。誰ものどめがたき世なれば、あくれ先立つ程のけぢめには、思ひ給へ及ばむに従ひて、深き心の程をも御覽せられにしがなとなむ。神わざなどの繁き頃ほひ、私の志にまかせて、つくつくと籠りむ侍らむも、例ならぬ事なりければ、立ちながらはた、なかくに飽かず思ひ給へらるべうてなむ日頃は過ぐし侍りにける。あんどなどの心を亂り給ふさま見聞き侍るにつけても、親子の道の間をばさるものにて、斯かる御なからひの、深く思ひとどめ給ひけむ程を推し量り聞えさするに、いと盡きせずなむ」とて、しばく押しのごひ、鼻うちかみ給ふ。あさやかにけだかきものから、なつかしうなまめいたり。御息所も鼻聲になり給ひて、







盡きせぬ御事ども 柏木の話が交換され、  
にいつまでも柏木の話が交換され、

御のめにぞ 御息所の返歌。

偶々心強う 大區は、いつもは  
無強くてきはきとして快活な  
度だが、今はまるでその跡形も  
なく、見つともない。

格別よい歌でもないやうだが、  
この「玉はぬく」とある所が成  
程と傾かれるので致仕大區は悲  
しくなつて。

女は限りありて 女といふもの  
は、何といつても、あまり多く  
の人にもあはず、萬事が表立た  
ないから、悲しみも目立たない  
ものです。

あひ頼む人々 お互に力にしあ  
ふ文遣が多くなつたりして、死  
んだと聞いて驚き残念がる者も  
色々の關係からあるやうです。

その大方の世の覺えも 柏木が  
世の覺えもあり官位も高かつた  
のに死なれた事を思ふのではあ  
りませぬ。

塵を仰ぎて 古今變四「大空は  
塵しき人の形見かは物思ふごと  
に映らるらむ」

この御たたら紙に 御息所の歌  
を認めてある紙の片端に。

このしたの 致仕大區の歌。子  
が親の喪に服するのが自然であ  
るのに、今年の春は逆に親が子  
の爲に最染の着物を見て泣き暮  
してゐる事であるよ。

亡き人も あなたを跡に残して  
喪服を着て貰はうとは柏木も思  
はなかつた事です。

恨めしや 最染の衣を誰に着て  
貰はうとて、春の來ぬ先に柏木  
は死んだのか恨めしい事だ。

落ちて、えとどめ給はず。盡きせぬ御事どもを聞えかはし給ふ。  
一條の宮にまうでたりつる有様など聞え給ふ。いとどしく春雨  
かと思ゆるまで、軒の雫に異ならず濡らし添へ給ふ。たたら紙  
に、かの「柳のめにぞ」とありつるを、書い給へるを奉り給へ  
ば、御の目に「御目も見えずや」と、涙をししほりつつ見給ふ。うちひそみ  
つつ、見給ふ御さま、例は心強うあざやかに誇りかなる御氣色、  
名残なく人わろし。さるは殊なる事なかンめれど、この「玉は  
ぬく」とあるふしの、げにとあはさるるに心亂れて、久しうえ  
ためらひ給はず。致仕大區の君の御母君のかくれ給へりし秋なむ、世に  
悲しきことのきはには覺え侍りしを、女は、限りありて、見る  
人すくなう、とある事もかかる事も、あらはならねば、悲しび  
も隠るへてなむありける。柏木は不意な事だがはかしくしからねど、あほやけも捨  
て給はず、やうく人となり、つかくから官位につけてあひ頼む人々、あ  
のづから次々に多うなりなどして、驚き口惜しがるも、類に觸

れてあるべし。柏木は死を深く嘆く譯はかう深き思ひは、その大方の世の覺えも、つか  
さ位も思ほえず、ただ異なる事なかりしみづからの有様のみこ  
そ、堪へがたく難しかりけれ。どんな事があつたらあれる事が出来ませう何ばかりの事にてかは、思ひさ  
ますべからむ」と、空を仰ぎてながめ給ふ。夕暮の雲の氣色、  
鈍色に霞みて、花の散りたる梢どもをも、今までは氣にもつかなくつたが今日ぞ目とどめ給ふ。  
この御たたら紙に、木に子をひかしてこのしたの手に濡れてさかさまに霞のころもきたる春かな  
大將の君、木に身をひかして亡き人も思はざりけむ打捨てて夕べの霞君きたれとは  
辨の君、  
恨めしや霞のころも誰著よと春よりさきに花の散りけむ  
御わざなど、世の常ならずいかめしうなむありける。大將殿の  
北の方をばさるものにて、殿は、心殊に誦經などもあはれに深  
き心ばへを加へ給ふ。



思惟し歎くは、お歎きになるのは、當然と存じますが、又さうお歎きになつてばかりいらつしやいますのはどうかと存じます。

この言こそ、女二宮こそ、噂に聞いたより、考へるの深い方だ、かいらした方であつたら、前にも聞いたやうに、どんなにか外聞を思ふにつけても、心が動揺するの

かたちぞ、官の御器量はずう十分ではいらつしやるまいが、あまり不機嫌な程見苦しくなれば、何でみぬかたちによつて人を嫌つたり、又道ならぬ思を求めたりしてよからうぞ、見苦しき事だ。つまるところは、只氣立てだけ

わざと懸想びて、特に懸想がましくは仰しやらないが、  
そぞろかに、背高く、

かのとおと、湖月抄「朝、源氏の事と云々。今案、柏木と云々と云の殿といは、人爲也、おとと云の事にて然るべし。此院の女房は源を見奉る事はあるまじと云々」  
同じうはかやうにても、同じ事なら夕霧がかういふやうにして、(夫としてでなく)お出入りして下さつたら、  
右將軍が塚に、紀在昌が左大臣時平の息右大将保忠の死を悼んだ句「天與二善人一吾不レ信、右將軍墓草初秋」  
それ、  
世の中で、柏木の死はわけて上つたが、  
怪しう情を立てたる、柏木は不思議に情愛主義の人であつたら、思ひしやうもない率公人や女房などで年取つた者までが懸ひ悲しんだ。

びかさねさせ給ふ御とぶらひの、いと忝きに、思ひ給へおこしてなむ」とて、げに惱ましげなる御けはひなり。夕馬思ほし歎くは、世のことわりなれど、又いとさのみはいかが。よろづの事さるべきにこそは侍るめれ。さすがに限りある世になむ」と慰め聞え給ふ。この宮こそ聞きしよりは心の奥見え給へ、あはれげに、いかに人笑はれなる事を取添へておぼすらむ、と思ふもただならねば、いたう心とどめて、御有様も問ひ聞え給ひけり。  
かたちぞいとまほにはえ物し給ふまじけれど、いと見苦しう傍痛き程にだにあらずば、などて見る目により人をも思ひ飽き、又さるまじきに心をも惑はすべきぞ、  
みこそ、いひもてゆかひには、やんごとなかるべけれ、とあはす。夕馬「今はなほ昔に思ほしなずらへて、うとからずもてなさせ給へ」など、わざと懸想びてはあらねど、懇に氣色ばみて聞え給ふ。直衣委いとあざやかにて、たけだち物々しう、そぞろ

かにぞ見え給ひける。女房「かのとおとは、よろづの事なつかしうなまめき、あてに愛敬づき給へる事の並びなきなり。これは雄しう花やかに、あな清らとふと見え給ふ匂ひぞ人に似ぬや」とうちささめきて、女房「同じうは、かやうにても出で入り給はましかば」など人々いふめり。夕馬「右將軍が塚に草初めて青し」とうち口ずさびて、それもいと近き世の事なれど、  
う遠う、心亂るやうなりし世の中に、高きもくだれるも、惜しみあたらしがらぬはなきも、  
怪しう情を立てたる人にぞ物し給ひければ、さしもあるまじきおほやけ人、女房などの、年ふるめきたるどもさへ、  
しび聞ゆる。ましてうへには、御遊びなどの折ごと、  
思し出でてなむ、しのばせ給ひける。「あはれ衛門の督の」といふことぐさ、何事につけてもいはぬ人なし。六條の院には、ましてあはれとおぼし出づること、月日に添へて多かり。この若



310  
138

終